



蛸親爺

第5話 地下鉄道

雅^が雲^{うん}すくね

『小川』と漆で示した門札に向かって、「いい胡椒があるんですが。本場インドの物ですよ」と背広の男が商っている。

インターホンからは、「せっかくですが、結構です」と婦人の声が伝わる。背広の男は、「では資料だけ入れておきます」と郵便受にチラシを投げ入れて去った。

小川家をめぐる生垣に纏いついた鉄線の蔓が、往來の上まで伸びて揺れている。庭には黄色の花をつけた柿の木や、淡い蕾をつけた槐が枝を差し交わしている。

「たーこたーこ。たーこ、たーこ。暑いね。こう暑くちや乾いちまうからな。帽子をかぶらねえと。へへっ」と帽子に手をやった。

麦藁帽子を載せた蛸は、梅雨明けの風を含んだ日差しをのなか、小川家の門を素通りし、生垣へ出る。

「小川さーん。小川さーん。いるー」

蛸の呼ぶ声が生垣を越えて庭を伝い、縁側に乗り、風とともに簾を動かし障子に当る。当たった障子が開いて、クーラーの冷気とともに小川青年が縁側まで出た。

「あ、おじさん。こんにちは」

「今、空いてるかい」

青年は右手の人差し指を文庫本に挟み込んでいる。

「ええ。とりわけて用は」

「じゃ、野球見に行こうよ。野球。券貰ったからさ」

「ああ、いいですね。行きましよう」

「ビールでも飲みながらよ」

「少しの間待っていて下さい」

青年は障子のうちへ入る。洗面台で手を洗ってから、二階の部屋まで戻った。壁一面に据えつけてある本棚の、ブラシやスプレー缶が並ぶ棚に手を伸ばして、日焼け止めのクリームを手にした。

青年はブラシを手にする。黒塗りの本棚のガラス戸を鏡に、細い顔を映して、髪を右左と梳くしけずる。

待つ蛸は往來の上まで伸びた一本の鉄線蔓をつまんで、生垣に引っかけている。

蛸が足を垣根にからめて遊んでいた時、青年が三枚並べて敷いてある花崗岩を踏んで、門から出て来た。

「お待たせしました」

「いや、いいよ。急がねえから」

「試合は何時からですか」

「六時だな」

「まだ三時間もありませんよ」

「いやいや。せっかく券を貰ったんだから、試合前の練習から見ねえとな」

「そういうものですか」

「なに、練習もおもしろえのよ」

路地の出口に店を構えたしるこ屋の店先に、『氷』の幟がはためいている。蛸と青年はその角を過ぎて通りに出た。

「うおん」と頭の上より、吠える様な音がした。犬にしては覚束無い吠え様である。

蛸と青年が見上げれば烏が電線にとまっている。

「今の音は烏か。犬みてえに鳴かなかったか」

「烏の声帯で犬の様に吠えると、ああんりそうですわね」

奥の路地から犬の吠えるのが響いてくる。犬が吠えれば、烏は犬の声色を使って鳴き返す。

「ありゃ、烏が犬のまねをしてるんじゃないかねのか」

犬は疍を高ぶらせて、吠え続ける。烏は頭を廻らせて、「がらがら」と

くちばしを上げながら笑った。足でつかんだ電線を縄跳び風に揺らしている。

「烏も進化しているんですかね」

「吠える事など雑作もないこった、と犬をあざけて遊んでいるみたいだな」

「そういえばこの間、六儀園を通ったら、烏が夜に飛び立っていました。照明の下でしたが」

「へえ。烏目は治ったのかね」

往來の脇に地下鉄の入口が口を開けている。

「おじさんはエレベーターの方がいいですか」と青年は気をつかう。

「そうしてもらえるとありがたいですや。階段の角がね」

蛸と青年は入口脇のエレベーターに乗り込んだ。地下に着いて扉が開いたところに、サラリーマンが二人、三人と待っている。体を斜めに肩を引いて、蛸を通した。

「いやいや。どうも」と蛸は足を挙げて通る。

「百九十円ですね。二枚買いますよ」

「ありがたいよ。帰りはおれが出すからよ。いや、やっぱり酔っちゃまうとあれだから、今払っとくわ。ついでに帰りの分も預けておきますよ」

青年は小銭を受け取って、先に改札口を通る。

「ほいよ」と蛸は改札口に立つ鉄道従業員に切符を渡した。従業員は自動改札機に切符を入れて、先から出てきた切符を取ると、背を屈めて蛸に切符を渡す。

「どうぞお進み下さる」

「へへっ、どうも」と蛸は改札口を抜けた。

ホームへ至る階段をいざりながら降りる。

「あの自動改札ってのはなんとも難しくってね。一度は、切符の入口に手がとどかねえから、改札の罫が開いていたし、七面倒だと思ってそのまま抜けようとしたら、チャイムが鳴ったとたんに、罫が閉じやがってよ」と頭を一本の足でさすった。

「閉まるの早いですよね。あの板」

「目いっぱい伸びりゃあ、なんとか届くんだが、いちいち手間取るから、ああやって駅員さんにやってもらってんのよ」

「その方が社会の経済にとってもいいと思います」

「おれなんか、なんのかのと自動改札に引っかかるけどな。前の奴がぶっ壊して通れなかったり、入ろうとしたら、反対から来た奴に止められたりな。昔は駅員が鉄持って箱に入れて。それこそ、芸術的にさばいたもんよ。あれでよかつたんだよ。あれで」

ホームで待っていた人が、下りる者と入れ替えに電車に入り込んでいく。

「ちょうど来ましたね」と青年も乗る。

「この電車でいいのかい」

「ええ、確かです」

青年は入口脇に腰をかけた。

青年と並んだ蛸の、目を向けた先には白人の親父と男の子供が並んでいる。子は靴を脱いで席に立ちながら、親父に手を取ってもらって遊んでいる。

「どうも地下鉄ってのは目まぐるしくってねえ。慣れねえ駅だと、右も左もねえし。無事に乗り換えが済むのは十のうち、六か七だな。乗り換えなんて賭けみたいなものですよ」

「案内板を見るといいですよ」

「いや、案内板を見ても意味が呑み込めねえのよ。赤や黄色の丸印と矢印と、電車の名が記されてあるのは認められるんだが、眺めているうちに探していた物を忘れちまう。乗り換えようと思って階段を登って通路を廻るのに気が奪われちまって、どこまでも展望が開けないんじゃない。結局、人に尋ねるのが早いな」

「慣れないと難しいのかも知れません」

「あれなんだよ。地下なのがいけねえ。地面の下で矢印向けて、あっちこっちって言われたって、見通しがきかねえと。なんで地下鉄ってのは、電車が並んでないのかね。だいたい、今どこにいるのか知れねえのに、方向板の矢印だけで見えねえ先に進むのって、あれじゃ、迷路だよ」

「確かに、地下街から人っ子一人いなくなったら、迷路の様に感じると思っています」

「近頃の人は平気なのかね。昔は、例えば飯田橋の停車場で降りるじゃない。新宿から来て。それでまた九段の先へ行こうって時にゃ、隣の停車場に九段に行く電車が見えて待ち受けているのよ」

「電車って、都電の事ですか」

「そうよ。乗り換えの停車場が一つにまとまっっていて、ありゃわかりやすかった」

「都電はのんびりしていいですよね」

「ああ、あんまりのんびりし過ぎて、つかえていたけどな」

「廃止された頃ですか」

「あの頃は急に車が増えてな。通りも今みてえに広くなかったし。車が都電の線路の上で止まって、客はてんでに降りていたっけ」

蛸と青年に相對して坐る白人の親父が、男の子を抱え上げて、振り動かす。揺れに任せて大きく宙を遊泳させる。逆立ちさせる。しまいに一回転させた。

蛸と青年がそのめまぐるしい有様に見入る。

「外人は憚りがねえな」

「近頃はヨーロップでも路面電車が見直されている様です」

「またこの頃は、のんびりしてきたのかね。第一こんな地面の下じゃ、外も見えねえ」と坐っていた蛸は、頭を後ろに向けて硝子窓を指す。

「ほら、おれが映ってるだけじゃねえの。やっぱり乗り物に乗ったら、風に当たられてえな、風に」

「車でも新幹線でも、窓が開かないと、酔ってしまいます」

「やっぱり、空気が必要だよな。空気が」

地下鉄が駅で停まった。扉が開いて、十歳くらいの女の小児が入って来た。裏にローラーのついた靴で、蛸の前を滑る様に通り過ぎる。

「あ、ありゃ何だ」と蛸、驚く。

「今の子は何だか、妙な歩き方していなかったか。浮いていたぞ」

「浮いてはいませんよ。あれは、ふつうの靴底ですが、踵にローラーがつ

いていて、爪先を上げれば、ローラースケートの様に滑れるんです」

「この頃はそんな物があるのか。器用だね。へえ。踵で滑るのか。うん。いいなあ」と小児へ向いて蛸は羨んだ。

「おじさんは乗り物が好きな様ですね」

「ああ、わかるかい。へへっ。なんていうかさ、動く物って爽快でしょ。自分はそのまま、眺めだけが動いてっさ。風を軽く感じるくれえが一番だ。あんまり早過ぎるのも忙しないわな。自転車漕いでもね、つい立ち上がっちゃうのよ。風を満身で感じるからね。ま、自転車ももう乗らねえがな」

蛸が向かいに目を戻すと、白人の親父はくたびれたけしきで新聞を拡げている。子供は席に立ったまま、指をくわえて蛸をつくづく見ている。

蛸が体をくねらせて、子の目をみはらせているうちに駅へ着いた。

「おじさん、後樂園に着きましたよ」

「おお、そうかい」と蛸は、椅子からいざり下りた。

「エレベーターは、向こうの端ですね」

「あ、いいよ。いいよ。エスカレーターで」

蛸と青年の前には金色のスカarfを巻いた高校生が三人乗っている。

「風来る？」とまんなかの人が、抑えていたスカート裾から手を離して聞いた。

「来るけど何してんの」

「ちょっと実験」ということを話している。

青年は『そろそろテストなんだな』と思いながらエスカレーターで運ばれている。

蛸は『綺麗な人だな』と思いながら、化粧品の広告看板を眺めている。

蛸と青年は駅を出て、まだ疎らな人の流れのあとを球場へと向かう。

ドーム球場の入口の扉が開いて、内と外の気圧の違いのために風が吹き出た。

「おあっと」と蛸は麦藁帽子を抑えた。

「ドームにはこれがありますから」

「野球を見に来て帽子を飛ばされちゃかなわねえ」

蛸は頸に掛けた頭陀袋ずだぶくろから二枚の切符を出して、もぎりに渡した。

「あいよ。よろしくな。っと、ドームは涼しいねえ。昔、後樂園球場の頃は屋根なんてなくてな。真夏のデーゲームの暑さなんてな、たじろぐわ。それでも見物しながらのビールはうまかった。風薫る頃なんかは、風がそよいでのおんびりと見るには最高だった。夜には、ナイターの照明が夜空を照らしててさ、そこへ白球が大きく弧を描いて放たれるわけよ。プロの打つホームランは、夜空に向かって打つから心を躍らせたんだらうなあ。『月に向かって打て』なんつってな」

階段を登り切り、客席に出た。

「まだお客さんも少ない様ですね」

外野席では早くに集まった応援団が、応援歌を記した紙を配っている。

蛸はグラウンドを見渡した。

「ひろいねえ。愉快愉快。おっ、練習していますな」

蛸と青年は階段を二十段ばかり下りる。

「この辺でいいですか」

「そうさな」と蛸は腰をかける。

「選手がグラウンドを走っていますね」

「ああやってな、皆で世間話でもして、笑いながらで集注力を高める奴もいりゃ、独り黙々とこなして集注する奴もいる。まあ、打つにしても投げににしても、やり過ぎねえこった。試合前の練習じゃ調子がいいのに、本番になるとからっきしな奴がいるが、ありゃ、相手に合わせちまうんだな」

「受験で言えば、志望校対策ばかりで学力がおぼつかない感じですかね」

「辛抱は他人のため、努力は己のため。と言うがな、練習という作業をしているだけで、本番のための練習が出来てねえんだらうな。そのくせ、データ分析とか、一人前の口聞いっぴちよまくからな。『頭を使え』って。頭を使う前に気力と体を使わねえとな。並外れた体を持っているんだから」

「順序が逆なのかもしれません。他人の集めたデータも合格体験記みたいなものですかね」

「そうそう、単に実力不足、練習不足だけかもな。相手が弱点突いてき たって、お構いなしで自分の力をつけりゃあいいのよ。その方が楽しいで

しょ。辛抱したって、何もなりゃしない。本当よ」

「そういえば、前のワールドカップで、ブラジルは、しばらく優勝から遠ざかっていたから、堅守速攻のチームとして作ったらしいんですね。より勝ちやすい方針にしたらしくて。実際、優勝候補だったんですが、準々決勝でオランダに敗れてしまって。解説の人が、規律のよいチームだから、予定通りなら力を発揮するが、予定外の事になるとわからなくなると言っていました。『ちょっと、ブラジルは何をしているのかわからない感じですよねえ』と。予想外になった時に、すべき事がわかるのが精神力の強さとの事で」

「そうなの。おれはサッカーはわからねえが、ブラジルの敗因は、優勝から遠ざかっているからって、柄にもねえ戦術を取り入れたからだろうな。うまく行かねえ原因を状況のせいになっているから、分析しだすんだよ。そもそも弱くもない者が、弱点を突く様な事をしていたら本当に弱弱しくなりゃしないかね。強いチームは、強いチームの戦い方を貫くべきでしょ」

フェンス際に居並ぶ客がグローブをはめ、左のこぶしで叩いている。

「前の人たちは、グローブをはめていますね」

「ありゃ、ホームランボールをキャッチするためよ」

「素人が直接捕球出来るものなんでしょうか」

「うまくすりゃあな。ホームランボールは貰えるしな」

「なんとなく、夢がありますね。ホームランボールは」

「まあ、ドームなんてなあ、お客が多いから、なかなかうまく出来ねえだろうがな」

「空いていれば出来そうですね」

「ありゃ、まだドームがなくて、後楽園球場だった頃な、昼間に試合見に行ったのよ。日ハム×ロッテ戦」

「ああ、両球団のファンは傍目にも熱い応援をしますよね」

「そりゃ、今の話だ。あん時はガラガラだったな。肉屋に券を貰ってね。反対側に坐った客の数を一人一人、眼で拾えたくらいだ。客の半分は酔っ払いで。普通の客より応援団の方が多いくらい。それでも日ハムの応援団は盛大にやっていたが、ロッテの方は何だか応援団いるんだかいもないんだ

か、ポロシャツのあんちゃんが一人、ラッパを吹いてるだけだった」

「ラッパの練習をしていたわけではありませんよね」

「いや、一応ロッテの攻撃に合わせるたからな。本物のファンなんだろう。日ハムの客のヤジの方がやかましかったけどよ。それでその時も、やっぱりグローブをしたのが二人いてよ。ハムの選手がホームランを打ってな。そのうちの一人が拾ったのよ。歓声上げて、席に戻って。その後、どうしたかっつうと、見るのに飽きたか知らねえが、外野席でキャッチボールを始めたんだ。ホームランボールで。あんなもん、相撲を見に行った客がよ、勝手に升席ますせきで相撲を取り始める様なもんだぜ。それで試合が終わってから、『ボールにサインもらいに行こうぜ』とか言ってる」

「はあ、のんびりしてたんすね」

「まあな、野球の長所はそこよ。見るのが楽なのよ。野球はビールとつまみを手いのんびり見て、攻めと守りの交代の時とか休みも多いからな」

「野球は間が多いですよね」

「日本人の性に合っていたのよ。そういや、日ハム×ロッテ戦の売り子、あの時の売り子が変わっていたな。確かビールと、ホットドッグを買ったと思うんだが、おれに売った後、横に坐って溜息ついてんのよ。『ピクルス余ったので、あげます』って付け合せの刻みピクルス十袋ばかりよこしてよ。そんなにいららないよ。『兄さん景気はどうだい』って聞いてみたらよ、『ええ、まあまあです。』って言うんだ。『国はどこだい』『東京です』『学生かい』『いいえ、大学は五年前に出ました』って、大学を五年も前に出てビールの売り子やってるのも妙だからよ。ちいと話したのよ」

「おじさんは何て言ったんですか」

「犬か猫を飼って言ってやったんだ」

「猫は不思議とかわいいですよね」

青年は選手の投球練習や打撃練習から眼を放した。外野を見ると、一人だけ走っている。

「まだ走ってる人がいますね」

「なに、あいつも、昨シーズンは打率二割八分、本塁打二十本の成績だったからな、今年は三割三十本を目指して気合が入っているんだろ。まあ、

そう言いながら、達成した者より、成績が下がった者の方が多いいけどな」

「ホームランを欲しがってバランスを崩すんですかね」

「ホームランを捨てた者が三割を超えられるな。ヒットを打つ方が簡単なのに、ホームランを欲しがっちゃう」

「ホームランバッターより、ヒットをこつこつ打つ人の方が引退も遅いですよね」

「体に無理がねえんだろうな」

「メジャーリーグでは、無理をさせない様に、試合で投げる球数も決まっていますからね。そもそも、練習ではあまり全力で放らないみたいですし。十分な体調で試合に臨むために練習があると言うか、むしろ普段は体調管理の結果より重視しているくらいに見えます」

「やりがちだけどな。サラリーマンと同じだな。仕事を完璧にこなしたがのよ。若いうちは。体調そっちのけで」

「サラリーマンも体調ですか」

「そうよ。近頃じゃ、米国型社会になったって、サラリーマンなんかも、口では言うけどね、やり方がまだまだ日本式なんだよ。野球ならゲームセットで終わるでしょ。そしてすぐに次の試合が来る。サラリーマンだって同じよ。ただ、仕事振りを米国型にするなら、生活全体をしなきゃ、もつわけがないな」

「米国では仕事が続々と来ても、契約が無理をさせない様になっているみたいですからね。勤務時間や、仕事の種類も。サラリーマンも野球選手も」

「仕事は間断なく来る。家の事もやらなきゃいけない。社会はルールが増えて面倒になる。その上で、義理の会合や宴会に出席してちゃあな」

「日本人は、休みの日に休んでいないって言われますよね」

「ただ、話し合える環境を作るのも仕事のうちなのよ。サラリーマンてのは、会社を出ても、休みの日でも、休んでいたんじゃないかって、付き合いをしていたんだから。いまだに毎日、赤提灯ののれんくぐって体調を下げる様な事をしていたら、そりゃもたないよ」

「僕も、中一の時まで、近くの書道教室と、隣の家庭教師の人に教わって

いたんですが、二年に上がって、有名な進学塾に通い始めたんです。電車に乗って。でも、夜遅くなるし、成績が下がってしまったので三年になってやめました」

「そうなの。遠くの物ってのは、よさそうでも、それなりに効率がよくないからね。結果を求めて無理しちゃったのかね」

「何と言うか、我慢して勉強する様になってから覚えられなくなって」

「そうだよな。朝から晩まで勉強していたって、だから営業みてえな物だよな。続かなきゃしょうがない」

「体のコンディションを二の次にしたら、成績が下がりましたからね。その後、また家庭教師の人に教えてもらって、書道教室も通い始めました。僕以外は小さい人ばかりでしたが、楽しかったですね。字もうまくなりましたし」

「長くやってりゃね、何だって上手になるのよ。何事でも熟練してくりゃ、勘所が見えてくるんだな。それで効率よくこなせる。給料も上る」

「練習で修正するよりも、実際の試合で考えながらした方が上達するでしょうからね」

「そうそう。やっぱり現場に出ないとね。本物を見て、人は出来上がってくるんだから」

グラウンドでは練習用具が片づけられる。係員が出てグラウンド整備の仕事を始めた。

「選手が引き上げて行きましたね」

「おう、始まるな。この試合前の時間がいいのよ。そろそろ飲んどくかな。あとイカ。たーこたーこ。たーこたーこ」と蛸は売店へ下りて行った。

ビールに口をつけながら席に戻って来た。割りイカに手を伸ばし、試合を見物し始める。

初回、ランナー二塁のチャンスに、選手が打席に入る。

「あいつも昨日、三タコだったからな。ここいらで一本打っとかねえと」

「そういえば、どうして打てなかった事を『タコ』と呼ぶんでしょうか」と蛸の頭を見た。

「ありゃ、ずんべらぼう」って事だろう」

「ずんべらぼう」ってなんですか」

「のっぺら坊、とか、締めなく、とらえどころがねえ時に言うが。両方だな。打たなけりゃ、ヒット零本でのっぺら坊、さっぱり仕事が出来ずに締りがねえってか」

「ああ、それでタコですか」

「まあ、たぶんな」

「たぶんなんですか」

「こういう言い回しは、たまたま誰かが使って、たまたま通用して、人の口に上がるにつれて出来上った物だからな。とにかく三打数ノーヒットなんて言うより、三タコって言った方がしっくりくるのよ」と物知り顔をす

る。
「三打数ノーヒットって言うのと、ヒットの本数しか言い表していませんが、三タコとなると、一人蚊帳の外、試合から外れてお役に立たなかったって感じが伝わりますね」

「その感じを“タコ”に言い含めるのよ。その場にいながら場に加われねえって感じだな。“タコ”は」

「あまり最近使われませんね」

「この頃は新聞記者も客も、気のいい連中が増えたんだろうよ」

グラウンドでは、蛸の評した打者が見逃し三振。『ストライク』のコールに堅く突っ立って、物を言っている。

下がるきっかけの欲しそうなけしきになってきたのに、ベンチから監督が小走りに駆け寄った。

ストライクの判定など見えない蛸が、酔いに任せて外野から声を上げる。

「をう！ どこがストライクだ！ 昨日飲みすぎで目が回ってんだろ！ イカ食うか、イカ！」とイカの袋を掲げ、掲げしなに目に入った売り子に、「兄ちゃん、ビールちょうだい！ ビール！」

蛸が一イニング回ごとに一杯を飲み干し、顔を赤くしながら手洗いとビールを往復する景色に青年が、

「なるほど、おじさんの観戦法では、サッカーとかはつらいでしょうね」

<つづく>